

真如苑

本報告は、管見の限りではあるが、刊行物より基礎資料を作成し、それに基づき質問項目をまとめ、真如苑本部にて頂いた解答等を整理した所産である。さらに訪問調査では、真如苑紹介ビデオ・真如苑第二十四回弁論大会ビデオの一部を拝見し、『歡喜世界』（季刊）No.154・156と『内外時報』（月刊）No.436・442を頂戴した。

※調査日時 昭和六十三年七月二十九日

※場 所 東京都立川市真如苑総本部真澄寺

質問に先立ち、真如苑に対する次のような認識を持って、理解することを求められた。即ち、真如苑は新宗教・新新宗教の類では無く、伝統的仏教教団であると主張するのである。その根拠として、教主伊藤真乗は、元来真言宗醍醐寺派の教師資格を持ち、大僧正位を有し、故妻友司は中僧正位を持つ。そして、金胎両部等の相承を受け、真言密教の奥義を悟った、とのことである。然しながら、この悟りが出家のものであり、在家のものとならぬ点に限界を感じ、出家主義への反省から『大般涅槃經』を選び、これを以て在家主義仏教へと転換せしめた。従って、真如苑のいう伝統的仏教教団とは、教義・行法等を形成する一要素に伝統仏教教団のそれがある、ということになる。

一、沿革

1 創立者 伊藤真乗・友司夫妻（教主・苑主）

教主とは伊藤真乗（明治三十九年〜現在）のことであり、開祖にあたる。苑主とは当初、教主の妻・友司（明治四十五年〜昭和四十八年）であったが、現在は宗教法人の代表を意味し、教主がその任にある。

真如苑は伊藤夫妻により創られたのであるが、その靈能力は両者別系統のものを相承（ソウショウ）している。即ち、真乗は天靈祭と称し、『甲陽流病籤抄』を、友司は地靈系と称し祖母以来の靈能力を伝えている。尚、創立者・伊藤友司の祖母「宝珠院悟法善道大姉」の伝承に、日朗真筆と伝えられる曼荼羅を以て、明治初年横浜にて除靈を業としていたとある（『一如の道』靈能編より）。又、創立者夫妻の有する真言密教の素養は、既述したとおりである。

2 成立

昭和十一年 成田山新勝寺の講「立照閣」として発足。

昭和十三年 「立川不動尊教会」と名乗る。

昭和二十三年 「まこと教団」と教団名を改める。

「まこと教団」時代、昭和二十四年七月三日の接心修行で、「自分はリンチを受けた」と幹部の一人が警察に訴えた為、伊藤教主は逮捕された。東京高裁で、懲役七カ月（執行猶予三年）の判決が下された。当時の新聞も「まこと教団リンチ事件」として報道した。その結果として信者や幹部に多数の脱退者が出て、教団の危機にさらされた。現在、真如苑ではこの事件を法難として捉えている。

昭和二十六年 「真如苑」と改名。

昭和二十八年 宗教法人として認証される。

昭和四十八年 「法母」と呼ばれた友司夫人死亡。

3 教勢

信者数 二百四十万人（現在公称）

靈能者 五百五十人（現在）

教師 一万五千人（現在）

信者の年齢層には偏りが無く、男女比は女性がやや多く六割を占めるとのことであった。入信年齢については、三十代に増加の傾向が見られる。それ以下の年齢は、親の信仰を引き継いでいるようである。また、入会の際には、家族全員が入信しているかどうかは問わず、一世帯を一セットとして考えるようである。

二、教義

1 おしえ

宗教の究極の目的である救済について真如苑では、「如来の真実の相であると共に仏法の究極たる涅槃（さとりの）実性の体であらせられるみ仏さまに、私達がまごころを運ばせ、その大慈のみこころに一如していくこと」（『一如の道』序より）と述べている。又、真如苑の教義は、真言密教と『涅槃経』と靈能力の三本の柱により成り立つのである。即ち、密なるが故に、語れない真言密教の至高の境地を、顕教たる『涅槃経』に聞き、それを靈能力（接心）により体現するのである。

ここで気になるのは、真言密教と『涅槃経』との関係である。真如苑の説明では、真言密教は出家サイドの理解する部分、『涅槃経』が在家サイドの理解する部分としている。一切経より『涅槃経』を選んだ理由は、『涅槃経』が在家の一信者チュンダに対して説かれたことによる。従って、在家主義を押し進めるには、最適の經典としている。そして、中国に於いて成立した涅槃宗とは無関係であり、その影響も無いとのことである。

次に、真言密教の内証と『涅槃経』のそれとが同一でなければならぬが、そこは靈能力により会通するのであるが、内容については密なるが故に、語れないとしている。

靈能力については、真言密教の素養と教主夫妻それぞれの家に伝わる靈能力の会合の結果であろうが、内容的には不明である。

2 經典

『大般涅槃經』

但し、勤行の折には、般若（理趣・心經）・法華（觀音經）・涅槃の三部經を読む。

3 出版物

『一如の道』・『朝夕のおつとめ』・『歡喜世界』（季刊）・『内外時報』（月刊）

三、本尊

釈尊涅槃像

立川市真澄寺には、釈尊涅槃像のほか、十一面觀音・不動明王が祀られている。これについての説明は、次のとおりである。

釈尊涅槃像

根本本尊

上品

十一面觀音

慈悲の姿

中品

不動明王

謗教難解の者の為

下品

四、組織

1 聖地

立川市真澄寺

2 総本部

立川市真澄寺

3 その他

東京本部・関西本部・茨城本部・九州本部・東北本部・北陸本部・大阪精舎・山梨精舎・伊東道場・真澄寺別院（栃木）・長坂記念館（山梨）

この他、札幌・秋田・宇都宮・入間・長野・岡谷・松坂・金沢・福井等の支部がある。

海外には、ハワイ・カリフォルニア・台湾・フランス等の支部がある。

総本部とその他は、総本部にその他が全て統括されている関係である。本部組織には、教務・総務・企画の三つがあり、その下に布教・教学・国際・広報・智流学院などの部がある。尚、本部職員は二百名程である。この中、智流学院とは教師養成機関であり、毎日曜日に開かれ、卒業には三カ年を要する。

又、真如苑には、経親（スジオヤ）制度がある。これは入信の際の勧誘者を親、入信者を子供とした、教主を頂点とするピラミッド型の縦割人的結合である。経親は、子の面倒を生涯にわたり見ることが建前になっている。然しながら、親と子の生活圏に隔たりがある場合には、その建前を通すことが難しい。そこで経親制度とは別に、壮年部・青年部・少年部等の横割りの組織がある。これにより、地域ごと・地域どうし（地域を越えての）・世代別・性別の活動とコミュニケーションが可能となった。また、入信時の縁も尊重されている。縦割と横割の二種類の人的結合により、真如苑における会員の把握は、より強固なものとなりつつある。その為、真如苑では支部をふやすことに力を入れている。

この点は、我々も参考とせねばならない。すなわち、新宗教・新新宗教の殆どは会員制である。信仰は、家ではなく、個人のものであるという会員制ならではの入信の簡易性が、教線を拡大してきた理由の一つであることは、否めない事実であろう。さらに、人的結合の多重性も組織の若さゆえのものと思われる。

我々における信者と会員とは、その持つ意味に相違がある。入信の過程にはそれが見当たらないものの、その後は、教師と信者の人間関係を基本とした、一人法人という枠内の活動とコミュニケーションに限定される。江戸時代以来の檀家制度をテリトリーとして、継承しているようにも思われる。檀家制度と会員制の問題は、人的結合の多重性を目指しながら、考えていく種類の問題であろう。

五、布教教化

1 布教

いずれの教団も、入信勧誘の実績が功德に比例する。この為、会員の一人一人が布教に熱心である。

2 教化

教化の任に当たる者は、修行の段階を、小乗・大乘・歡喜・大歡喜・靈能に分けた靈能位の者と、智流学院を卒業した教師である。教師は、他の仏教教団と同様に僧階があり、教義ならびに儀式を担当する。靈能は、専ら修行を担当する。真如苑における最も重要な接心修行は靈能のみが行なう。両者の関係は無関係である。教師ではあるが小乗の者もいれば、靈能でありながら教師で無い者もいるそうである。

ただし、真如苑では修行を重んじ、靈能になることを目指す者が殆どである。故に、接心修行は非常に盛んである。

六、宗教体験の実際と意義付け

真如苑における宗教行為には、接心修行と各修行の段階に到達したことを確認する為の相承会座、そして施餓鬼がある。

接心修行とは、仏性を磨き仏の境涯に達することを目的とするが、実際には、靈能と呼ばれる超能力者に成ることが目的であるから、第三者には理解不能である。但し、事例については機関紙等に多々掲載されている。また、この神秘主義が布教における有効な手段と成っているようにも思われる。

相承会座については、既述のとおりであるが、靈能の場合のみ、教主・両法嗣（教主の子供）が参加して靈能を發動させる。

施餓鬼とは、他の仏教教団と同様に、最終的には故人に対する回向・供養であるが、真如苑の特長は、兩童子（故人となった教主の子供）が、冥界において回向の対象を救うことである。

兩童子とは、教導院と呼ばれる三才にして亡くなった長男智文と、真導院と呼ばれる幼くして病死した次男の友一のことである。二人の死亡は、教主夫妻を宗教者として歩ませる理由の一つに成ったであろうことは、容易に予測される。しかし、真如苑ではそれ以上にそのことの意味を、キリスト教でいう原罪を背負って刑に処されたキリストと同様に捉えていると思われる。

その他、例外的に真言宗の儀軌に倣った真如苑流の葬儀を営むこともある。真如苑では基本的には、葬儀については旧来の菩提寺にて営まれるものとするが、諸般の事情で、宗旨・菩提寺が不明の場合、また遠方にて特に依頼された場合のみ勤めるとのことであり、その数は大変少ないそうである。

七、信者の義務

一世帯二百円の月会費のみと説明される。

八、財政

徳積と称する献金

接心修行の際の冥加料

施餓鬼の祈りのお布施

以上は、志であり金額は決まっていらないとのことであった。また、出す出さないも、個人の自由ということである。会費 月額一世帯二百円

九、入信の感想

特に取材できなかったが、真如苑第二十四回弁論大会ビデオの一部を見た限りでは、人生に指針を与えられて、救われ、有難かったとのことである。

一〇、日蓮宗との比較（魅力とその逆）

真如苑の魅力とは、一言で言えば、神秘主義に尽きると思われる。但し、本宗においても、加持祈禱の修法がある故、その点での対抗は可能である。

その他

週刊誌等で良く知られているように、真如苑の信者には、芸能関係等の著名人が目立つ。これは宣伝効果を考慮して意図的に、情報を流しているのではない。あくまでも一信者として対応しているそうである。

※調査スタッフ 赤堀正明主任、木村康之・竹岡智大所員、勝呂昌信研究員

※執筆担当者 西片元證研究員